

第3章 歴史文化基本構想策定の考え方

1. 策定の考え方

歴史文化を活かした魅力的なまちづくりに向けた、歴史文化基本構想の策定にあたっての考え方を示す。

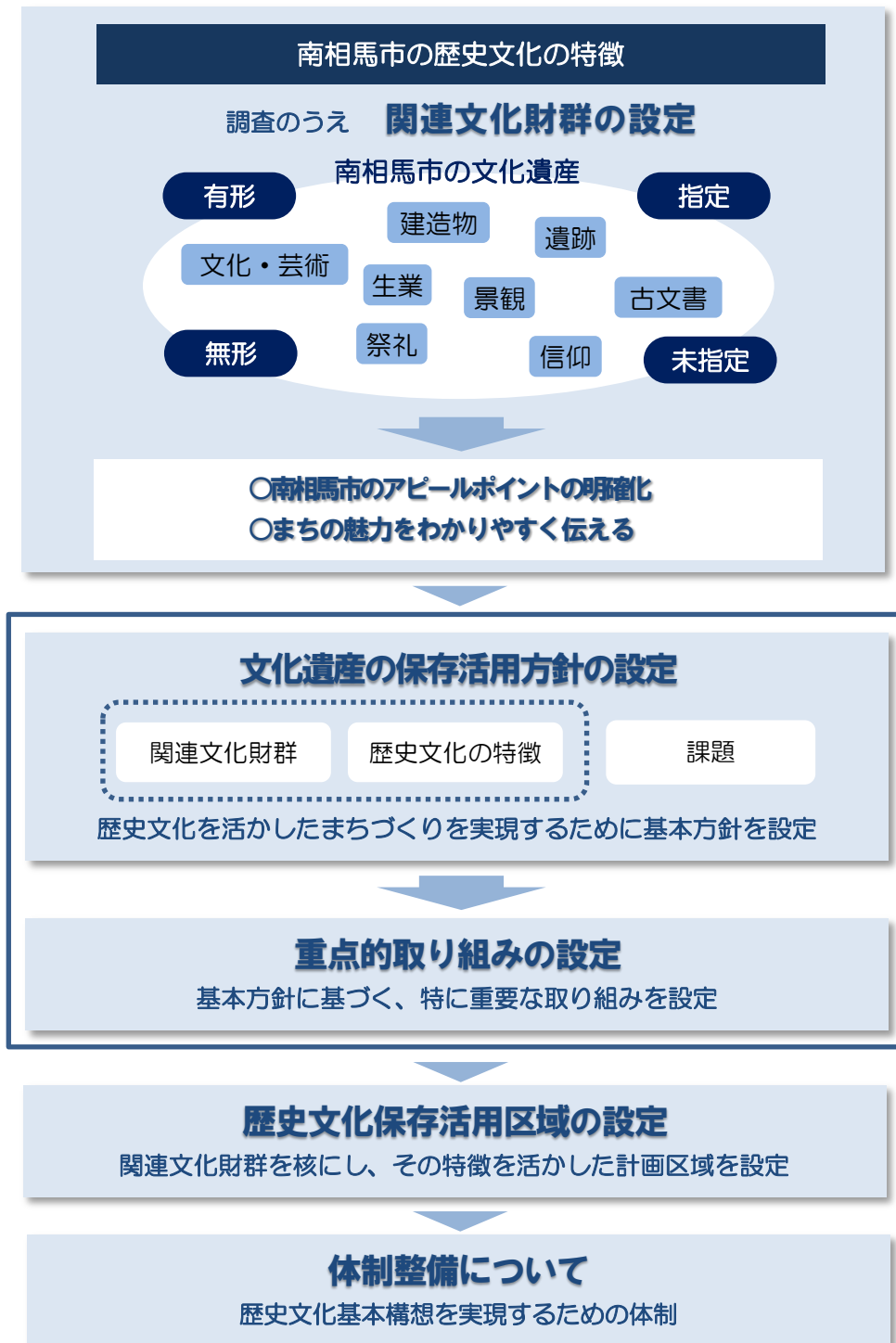


図 3-1 歴史文化基本構想の考え方

①文化遺産の総合的な把握

歴史文化基本構想の策定には文化遺産を指定・未指定にかかわらず幅広く捉えて的確に把握することが必要とされている。総合的に把握するための調査にあたっては、地域の文化遺産の特性に応じて、既往の文化財の類型に捉われず多角的な視点から見直すことや、有形・無形、指定・未指定に捉われないことが重要となる。

このことから、これまで実施した博物館ならびに市史編さん事業等の調査を再整理し、改めて文化遺産の総合的な把握を行った。また、これまで、社寺を含めた歴史的建造物ならびに町並み、景観については、市では、調査の蓄積がないため、改めて、全市にわたる悉皆調査を行った。

この調査にあたっては、南相馬市の文化遺産の特性のほか、市民検討会で出された意見のうち、市民のなかで大切にしたいという共通認識のある文化遺産や、今後のまちづくりに活かしたい文化遺産などを踏まえ、下記項目を設定し行った。

○調査項目

史跡、野馬追、社寺、報徳仕法、近代化遺産（戦争遺産も含む）、文学・人物、歴史的建造物・町並み、街道、歴史的景観、祭礼・民俗芸能、震災遺産、自然・天然記念物、化石、生業・習俗、伝説

②南相馬市の歴史文化の特徴の抽出

歴史文化を活かしたまちづくりには文化遺産の魅力が共有されることが必要である。南相馬市の歴史文化の魅力をより明確にし、今後のまちづくりに活かすため、南相馬市の歴史文化の特徴を抽出する。

③関連文化財群の設定

関連文化財群とは、総合的に文化遺産を保存活用するために、有形・無形、指定・未指定にかかわらず、様々な文化遺産を歴史的・地域的関連性に基づき一定のまとまりとして捉えたものである。

一つの文化遺産ではその価値が把握しにくいのが、文化遺産をまとめて関連性のもったストーリーとして提示することにより、文化遺産の持つ新たな魅力を伝えることができる。このように関連文化財群を設定することにより、広く市民と行政に行政、市民、市外の人に南相馬市のアピールポイントを明確にし、文化遺産の魅力をわかりやすく伝えることが可能となる。

関連文化財群の設定にあたっては、南相馬市の歴史文化の特徴や、調査で把握された文化遺産の特性や周辺環境を基本としながら、より効果的な活用を図るために地域の実状に応じた考え方を整理する。

④文化遺産の保存活用方針の設定

文化遺産の保存・活用の方針の策定にあたっては、文化遺産の価値を維持・継承するための保存の方針を明確にしたうえで、この方針を踏まえた活用の在り方を定める必要がある。

以上を前提とし、関連文化財群の設定等により市民と行政で共有したまちの魅力をみがきあげ、活力ある歴史文化のまちづくりを実現するために文化遺産保存活用における課題を踏まえたうえで、基本方針を設定する。

⑤重点的取り組みの設定

市民と行政が基本方針に基づく文化遺産保存活用を進める上では、市民と行政が取り組むステップを提示する必要がある。については今後の文化遺産保存活用の方向性を具体的に示すため、特に重要な取り組みを設定する。

⑥歴史文化保存活用区域の設定

文化遺産の保存活用に取り組むにあたり、関連文化財群としての歴史的なストーリー性だけではなく、文化遺産の地域的なまとまりやコミュニティを考慮することが必要である。このことにより効果的で実践しやすい文化遺産の保存活用が図られる。

このため、関連文化財群を核にし、その特徴を活かした歴史文化の空間を創出しながら、地域の実状に応じて文化遺産の保存活用の実践につながる計画区域として歴史文化保存活用区域を設定する。

⑦体制整備の整理

「歴史文化を活かした魅力的なまち」を実現するためには、自分たちの生活に密接に関わる地域の文化遺産の保存・活用に市民の参加を促し、地域社会と行政等と連携・協力体制を構築することが不可欠である。

このことから、「歴史文化を活かした魅力的なまち」を実現するための体制整備について整理する。

2. 文化遺産総合把握調査

(1) 既往調査の整理

これまでに実施された、自然、歴史、考古、民俗、野馬追をテーマとした博物館の調査、旧小高町・鹿島町・原町市ごとの市史編さんの調査、各遺跡の埋蔵文化財発掘調査、歴史的建造物の分布調査等の成果がまとめられた市史や調査報告書等に掲げられている文化遺産を、調査項目ごとにリスト化し整理した。

(2) 補足調査

既往調査結果をリスト化するなかで、これまでの調査では蓄積が少ない調査項目である、社寺中心とした歴史的建造物ならびに町並み、景観、近代化遺産について補足調査を行った。

① 社寺

既往調査によりリスト化した対象のうち、特に南相馬市の特徴をあらわすものとして重要なもの、また祭礼などで市民に親しまれている社寺を対象とし調査を行った。調査にあたっては、これまで実施されていなかった建造物の視点から、敷地内に配されている本殿や拝殿、石碑や社などを確認し、建築様式や、それらに書かれている文章等から、建築年や沿革について確認を行った。

② 近代化遺産

既往調査によりリスト化した対象のほか、市民検討会や策定委員会において、南相馬市の歴史文化を物語るものとして重要とされた近代化遺産を対象に含めた。調査にあたっては、近代化遺産とその周辺環境の現況について確認を行った。

③ 歴史的建造物・町並み

既往調査で対象としていた中心市街地のほか、市民検討会や策定委員会の意見を踏まえ、中心市街地の周辺に位置する山側や海側の集落、また街道沿いに発展した町並みを対象とし調査を行った。調査では、地域ごとに建築様式、年代、意匠等にごどのような特色があるか確認した。

同時に、平成 23 年の東日本大震災による建造物の滅失や破損状況の確認も行った。

④ 歴史的景観

南相馬市の歴史文化、民俗、祭礼等に関連した景観を中心とし、市民検討会で挙げられた親しみのある景観なども含め、市の特徴があらわれた地形や、市の代表的な史跡や河川、また海や山からの眺望、海や山にある眺望点などを対象とした。調査では、実際の見え方や周辺環境の現況について確認を行った。

(3) 調査結果

既往調査および補足調査の成果概要について、調査項目ごとに記載する。

① 史跡

南相馬市には縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中世の国・県指定史跡があり、国指定8件、県指定4件と指定数が多いだけでなく、時代・内容が多種にわたっていることが大きな特徴である。

市指定文化財群でも小高区の縄文貝塚群は福島県を代表する貝塚集中地帯であることを示している。未指定の遺跡では山間部から海岸近くまで幅広く分布する縄文遺跡、奈良・平安時代の市内全域にあたる丘陵部にある東日本最大級の製鉄遺跡群、中世以来の当地方を国替えなく治めた相馬氏を中心とした中世武士に関わる館や墓地が残されていることなどが特筆される。

これら多様な史跡群は福島県の中でも代表的な遺跡も多く、当地方の歴史を物語る中心的文化遺産と言える。

② 野馬追

策定委員会、庁内での検討会、市民検討会においても本市の文化遺産として「野馬追」は最も親しみのあるものとして挙げられている。

野馬追に関連する文化遺産としては、行事が実施される神社、市街地の通りだけではなく、野馬追を支える人々、野馬追を眺める場所、野馬追のためだけに民家で馬を飼っている風景などがあげられた。また、江戸時代以前の野馬追に関わる野馬道、野馬土手などの旧跡が多く残されていることを確認した。

このように野馬追という分類により文化遺産を掲げることによって、野馬追が地域に深く根付いていることが改めて確認された。

③ 社寺

神社については、相馬氏にまつわる神社が多くみられ、古代行方郡の歴史を伝える延喜式内社が多数存在することも特徴的である。寺院について、小高・原町区には相馬氏ゆかりの寺院や寺院跡が多くある一方、鹿島区には岩松氏ゆかりの寺院があり、各地域の歴史性を今に残している。また、各区の市街地には浄土真宗移民に関連する浄土真宗の寺院があり、市内全域に移民が及んだことを物語る。

神社および寺院の建築年は、いずれも江戸時代に遡る建築は多くなく、神社は昭和初期に改築された本殿が多く見られた。神社の拝殿には特徴的な構造や意匠が見られることが確認され、中でも相馬太田神社祈祷殿は特に際だっていることが明らかとなった。

④ 報徳仕法

報徳仕法は江戸時代の天明の飢饉により多大な被害をうけた当地方を復興に導いた。この報徳仕法に関わる遺産として、報徳仕法を实践した富田高慶らに関

わる遺産のほか、報徳仕法に基づいて築かれたため池や用水路、さらに明治時代以降もその精神を引き継ぐ報徳碑が市内各地に残されていることを確認した。

また、同じく、天明の飢饉からの復興に重要であった浄土真宗を信仰する人々を中心とした移民の遺産も寺院の他、習俗、食文化、伝統芸能まで多岐にわたることが明らかとなった。これらは江戸時代末期の災害の歴史からの復興の歴史を物語るものとして評価される。

⑤ 近代化遺産

南相馬市の近代化を加速したものとして鉄道が大きな役割を担っていたとされる。この鉄道施設について、原ノ町駅に設置されていた機関庫や転車台は現存しないが、煉瓦造の隧道や油庫などの鉄道施設が市内に数多く確認できる。また、原町区には、山から木材を運び入れる林用軌道があり、これは原町区のその後の市街地のあり方に大きな影響を与えている。また、小高区には山で採掘した硅砂を市街地の工場へ運ぶトロッコ軌道、原町区の旧陸軍熊谷飛行学校原町分校の一部、また鹿島区を中心とした旧亜炭採掘場など多くの近代化遺産があることを確認した。

その他、原町区にあった無線塔は解体されているが、現在も市民に親しみのあるものとしてあげられており、現存していないものについても跡地等を文化遺産として掲げた。

⑥ 文学・人物

南相馬市は、俳句や小説などの著名な文学者を輩出しているほか、ゆかりの文化人が多くいる。中でもこのような文化人は特に小高地区で多く確認された。かれら文化人の句碑や生家や墓地、さらには島尾敏雄の「死の棘」など小説の舞台となった場所などが新たに文化遺産として挙げられた。また、彼らが主体となった遺産も改めて抽出した。

これら文化遺産は近代化による新たな文化の流入、窮乏する生活など南相馬市がおかれる時代背景を色濃く反映するものである。また、万葉集にうたわれた地区が2か所あり、古代南相馬の地域性を示すものとして広く知られている。

⑦ 歴史的建造物・町並み

明治中頃から昭和初期に広がった羽二重産業を背景に発達した建物のある小高区の町並みや、江戸時代の宿場町の骨格を残す鹿島区の市街地がある。原町区は、鉄道開通により駅前通りができたことで明治時代から昭和初期までの様々な時代や様式の建物のある町並みであることが確認された。いずれも各時代に工夫を凝らし、洋風意匠を取り入れた店舗が混在し、多様な個性を持った建物のある町並みが特徴となっている。

主要街道の浜街道以外の街道についても、小規模ながら発展した町並みが確認できた。市街地を離れた集落は、比較的規模の大きい養蚕農家の主屋が多く見られ、鹿島区の山側は、自然豊かな環境に屋敷が構えられていることが特徴となっている。一方、近代和風住宅や西洋館など、近代化の影響が見られる建築もいくつか見られた。

⑧ 街道

江戸時代に宿場町が置かれ、現在は常磐線が並行して南北に通る浜街道が軸になっている。西側の阿武隈高地を越え、中通りとつながる街道は複数ある。特に鹿島区を通る奥州西街道（通称、塩の道）は、中村藩主の参勤交代に使われたとされ、かつては経済活動の動脈であり、これに伴う「助けの名水」などの文化遺産が街道沿いに認められる。このような街道が経済活動等と結びつき、現在の市街地や道路網へと発達している。

⑨ 歴史的景観

市域は眺望にすぐれた小高い丘とそれらに挟まれる水田風景が市内各地にみられる。また、大規模な市街地化が進んでおらず、近代以降の大きな人工的な地形の変化が比較的少ない。このことから、各地にある史跡等の文化遺産とともに、その当時の人々の生活を支えていた自然が残されており、これらが一体となった歴史的空間を現在も感じることができる。

このような歴史的景観として、相馬野馬追に関わる野馬原の景観のほか、小高区の浦尻貝塚から望む太平洋や大悲山石仏がたたずむ森林空間がある。このほか、鹿島区の浜下り行事などの祭礼の場や街道沿いの溪谷などもあり、市内各地に歴史を感じる風景が残されていることが大きな特徴である。

⑩ 祭礼・民俗芸能

市内各地に多くの祭礼が残されているが、特に鹿島区に浜下り行事が多く残されている。多くが12年に1度の実施と継続が困難な状況にもあるにも関わらず、現在も引き継がれていることは地域のつながりが強いことが指摘できる。また、浜下り行事には多くの民俗芸能が奉納され、これが南相馬市に多様な民俗芸能が継承されていることにつながっている。また、特に獅子神楽と田植踊は市内全域で確認することができ、天明の飢饉など多くの災害を経てきた当地方にとって芸能の奉納が盛んであったことを物語る。

全国的に著名な民謡も多くが労作歌であり、当地方の特徴を色濃く残すものと言えよう。

⑪ 震災遺産

東日本大震災による被害を受けた建造物は現時点では南相馬市ではほとんど確認できなくなっている。土地に残るものとしては津波被害をうけた北右田のタブノキや海老浜のマルバシャリンバイ自生地などの天然記念物があげられる。このほか、津波・地震被害を物語る看板・写真、復興をねがうメッセージが書かれた小学校の黒板、復興事業により築かれた防潮堤など多様な震災を物語る資料は多くあげられる。また、震災のオーラルヒストリーや行政資料なども重要である。

南相馬市の震災遺産については、現在は震災後間もないため、遺産としてあげることが難しいものも多いが、今後積極的に収集、保存に努めていく必要がある。

⑫ 自然・天然記念物

指定文化財は文化遺産と関連して親しまれているもの、生息域の南限、北限を示すものが多いことが認められる。未指定のものは希少動物、植物を掲げたが、これらは山、川、海がおりなす多様な環境を反映したものである。また、冬の西風を防ぐ屋敷林である「イグネ」や震災により新たに地域の愛着を喚起した「鹿島の一本松」など新たに文化遺産と認識されるものもある。このほか、震災前に確認できなかったミズアオイが津波により再生されており、津波やその後の復興事業等による環境の変化にあわせて、新たな視点で文化遺産として自然を見直す必要も生じている。

⑬ 化石

約3億7000万年前から約12万年前にいたるまで、古生代、中生代、新生代すべての地質年代の地層が分布している。古生代の三葉虫、中生代の恐竜（足跡）・アンモナイト、新生代のクジラをはじめとした哺乳類など、各時代を代表する化石が産出し、ひとつのまちですべての地質年代の化石が採れることが、大きな特徴となっている。

中でも鹿島区では、大変貴重な中生代の小型獣脚類の足跡化石が発見され、原町区からは中生代の植物化石が豊富に産出することが、学術的にも重要視されている。

⑭ 生業・習俗

山、川、海がおりなす自然環境を背景に、多様な生業に関わる文化遺産が認められる。丘陵に挟まれた谷水田が市内各地で見られるなど生業の場のほか、真野川などの鮭漁、箕づくりなど現代も引き継がれているもの、かつての塩田での製塩用具などの民俗資料などがある。

このような生業を背景とした民俗知識、雨ごいなどの民間信仰なども南相馬市の文化を特徴づけている。

⑮ 伝説

国指定史跡「薬師堂石仏」にまつわる大蛇物語や同じく国指定史跡「泉官衙遺跡」・県指定天然記念物「泉の一葉松」に関わる「泉の長者伝説」など史跡等の文化財にまつわる伝説が残る。

文化財だけではなく特徴的な名所等が舞台となることが多くあり、地域の魅力が伝説を通すことにより豊かなものとして浮かびあがることが確認された。